

古來庵句集

911.3

1

風琴舎



高き山麓 後家 長江 都に 仇通
半く 久し 一節も 渠を 持て
出づ 一節 仇通 一節 持て けり
ふし 持て 仇通 人 國大 持て けり
ふし 持て 仇通 人 國大 持て けり
ふし 持て 仇通 人 國大 持て けり
ふし 持て 仇通 人 國大 持て けり
ふし 持て 仇通 人 國大 持て けり
ふし 持て 仇通 人 國大 持て けり

此は東菴主人の北道に入
りて月子年調詠す類
處の幽玄遠白或は集に
の著ある人にもある
心も万分の一にも
口人國大なる起し

古來菴主人北道に入
りて月子年調詠す類
處の幽玄遠白或は集に
の著ある人にもある
心も万分の一にも
口人國大なる起し

古来の庵句集を作るとき
不朽の法をくむる我族の
まじりし道にこそあるく
師にたあらふふへー需る
任せてーふ子序とやいふ

螺崖居士



古来庵句集

春と部

つ松やまきなりくく儂男やも
まのうやいふ暇にわいとい
あけ極るあまふれつを糸月
松島や見えきり悲やつるは
おゆとをあまわねー民おと
とねまのい榎をあらわす人

牛乳の味を好む人は少い

樽に二升入る

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

乳はよく煮て飲む

為牛や十三文清ありけり
眠し物子いけやる牛樂
と物子ふむふ歌なりあのを

是波父の名をいけ継の賀

標濃柳いけとやうと

大馬の賀

う玉やいけとけものをいけ

波系、おとけりて蓮葉の賀に

江乃高をいけふも又けやうと

江乃氏七十賀 題の賀

あゝやいけとけもの大流に

六十賀 題の賀

世に安きとけり十季の賀

福祿壽の賀

遠きやいけとけもの賀

御前やいけとけもの賀

おのれは かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

かくも かくも かくも かくも

新永代橋

深川へわさせふけーやまは雲
新うそを隠起くふんたうそ
何ちあともふーうそ急菜摘
落葉えー然うそかそやけふ
眠る路のそきーわったふと
地灯ふ急流丈えふうれふ
きぬー我偏田より又寝や梅菜
皆おらまはと入ーわったふ
引ーその夢る菜もふすれめ菜
本流を七つ下りふうふうふ
解ー六巻をふれうや若菜摘
菜名のむとに
解くといつたうそをけけ
梅のうそを
わったふと急流のふとふ

雲より川に松を粥乃喰うた
らゆ杖と志と打うる物
わすれを志地々のうら
たる此方より策の落にも
春義のこゝもとに載せて

舟僧となうと就そやと女う
年賀せし人

杖はす欠岩をも松のわう
をわれといふぬ針や梅
むらりぬや骨と皮なるを
一二端むれぬけと糸
糸とやうすけと糸を
むれぬれ葛藤もれぬ
抱女と易の響ふやむれ
糸と糸もれぬうら
うと糸もれぬうら

と寸校りたる目費や六免れ
山賊の炭やと歸りてむ免の
梅の香り日向にすれあふ
そ免うや沙草の湯屋に於て
被むる免うはしをるの
半柿紙に免は梅に於て
日の校や五幅たる人む
梅既り乾鮭も免はし

五やふ免れの手あふる
免戸天満宮へ申納せり

免きけり惣名代やむ免
あふる童やむ免は

新書

あむ免や粥に砂糖紙より人

六や一き

る姓の加減一とや梅の

泊帆より

鏡梅の香もや雪模十文字

四十賀

初を此杖雪頼杖む久のもち

了満まを細く句を歌

松梅を雪より若く力を示せ界

羊黄父の七十の賀

ふまゝの常こるる風情や固れ梅

水戸藩才を以て樂

むらゝるや女神の厨子をいゝ人時

新戸を細

松梅乃外り念なり春のいろ

花既く時いとく若やむらる敷

梓弓む久々の神常りこゝろと

傾け子と梓

おもひも新舊勝人やうりみ答

若くは殿の海よりも梅を咲しうわ

このうらなはれぬ改をうるものよこおき八妹をうりし

うんふや結細る数巻中
うんふや圓心ふき谷竹ん
きや禪——ふき谷ふき
うんふすや夢心ふき谷竹ん
きや夢心ふき谷竹ん
うんふすのふき谷竹ん
うんふすのふき谷竹ん
うんふすのふき谷竹ん

旦廻の追悼

新嘉坡

うんふすのふき谷竹ん

うんふすのふき谷竹ん

うんふすのふき谷竹ん

うんふすのふき谷竹ん

うんふすのふき谷竹ん

うんふすのふき谷竹ん

地嵜しうとふこひたふ極うか
ち柳しうてたき都のあ居うな
うしうもふ換抄せぬやうたふ

意光地を地

兄ろちれ神しうてきれた極うな
東海ぬら魚れ眼意要る那
ゆきしうの意ん意てしうをうな

火しゆてほもたかろやあを船
ちしきれ波意とくしうあふ

訂割るしれの仕事やあを愛
意く海都い川ふち橋うな

初年や一日高港うしうたふ

はつむるや抑給の極えれすうたふ

大川するやあ制れ番ろ意れ意

初年や和調ろ意れ意稀しう

角うなやあ婦あれ耳ふ風

はつとまや片意電梅の掟書
初子や於海万不足乃女形

29. 12. 1901 - 1. 1. 1902

此乃沈氏之印

兄の宛へはこれにや

江戸もろや表布と山椒の神と彦

此も中宮の御うけに極の眉を川く
 夏の御しに此を念さうして

此乃書之真蹟也

此乃日用字之類也

[illegible]

烟 之 如 此 其 中 亦 有 其 妙

如法製煉之藥水

此乃前之草書

楊子武志

義仲乃其子也

也。一、此書乃前代所無。

おもしろいや一投数あるいゝのかと

改名をたてしむるはすゝめなり

俳名をきき井戸にけし風の中

いかにんや十に九とをぬかし

紫乃とちや竿の端をあらわし

灰小笠をちたれとれのほろもくわ

美人字牌む

紫乃と華なりはわと黄なる目、を

帰る雁洲田をきいれといふと弦

ばとくちや經書堂にいづ入行

万花祖母の八十は笑

潤ふやちり雀子総ありさー

紫野子を睨む

歩むるけのほろとやわすれぬ

年史を睨

ころ佛二日の山もほろとる

恰のちてやむなれくものゝ
春く小治相れ木をいの家
奥なるやふつゝなぐも目鼻も
硝子紙よりけり遠くや離の然
しなえさるゑをふけりや女形
奥をたりやふきぬけりもあま
都と離に度の水もるえりか
浅いなるを我もあま衣敷なる
をく味も飯をぬけり千なる
泥をき酒をあるはくは千なる
江の端ふて
露れ子のうつゝけりくは千なる
か代や峰とさひきりかの松
根さくやゆれ葉のけりもく
とくけりや隣つゝのちり
代原唯若もてけりれなるは

法華會より免るる佛のち極ち
てうくや加護の甚せにらんとす
娘駕より何なるを能く
る端の於菓子ふれふこと入る

花子乃重小

蝶の飛と夏哉あはする葉飯とな
ふれしといふと嬌てもはらきき
花寺のとしふくともやとほこめ火

赤飯山

八宗乃名中にもふく霞ふる
けりきり雨戸よりはれぬ
流津流とくくちあやうあふ

花峰入

晴るいと美し貝吹ふもこのふ

再義といふのわかれと先達して

峰を花ふるくく越えや

東叡山江此

山江此大なる

此の画に

山江此大なる

此の画に

山江此大なる

此の画に

山江此大なる

此の画に

山江此大なる

此の画に

山江此大なる

山江此大なる

山江此大なる

此の画に

山江此大なる

青樓

さくさくしき若葉の如くふにふる
たふさくやちねの如くはるやねの如し
笑もたふさくき世若葉の如く山はる
雲はるさくの如くねの如くやまの如く
一刻り朝と千糸江戸はる

源川二新葉の如く
志か風ふさく麻の如く山はる
時ねの如くはるにふるの如くはる

王子稲の如く
やねの如く春の如くはる山はる

ひき星た神宮の如く

かみ戸の如くはるにふるやねの如く

欠氣改名の如く

かみと俳名はるにふるやねの如く

第幾改名はるにふるやねの如く

うらうら名の暮るる夕ぐれ

いさめ茶亭の犬鳴く

先世を醫治也くあさくそ

ちいしくぬあしあろいとさ

升を降む

うらうら海にぬるやゆき

舞あうるき雀やいりこを北

梨華一枝ふるあさくや国の

雨のりやあさくをわし

後園ちう

ころ高羽いてや蹴踏るはる

石女を山吹の雨流やあさ

系棚り船のふりこ

亀戸

鼓を絶うとくさるるあさ

春のうら底くさるるあさ

圖大万句

窓より多婦 花雪の松の影

春堂万句

いとつに松意 栢もあはれき

やまのけりあやめはさきとちんをうらやめ
人々の一字を記してあらさめやうやうやう

うらみすの押巻 春やうらみ

二月廿

年つらうあはれなうらみ

二月三日

首途

はくくききり肺や杖乃し

はくくききをぬらはくきき

明秋のしるしをうらみ

いゝ見えの梅きり笑道者

りあはれや背戸に機織る

六月村

いふ故を六月もとの瓜乃種

砂のいえるをさきにさる字
成るく木句なり

親しやるをさき踏みし中

まか

口のあや蹄 水あふれ満ち水

井の端

とる高し 水とてやいし井の端

三月月や流月を月水松うけ

新雪泊

春乃初や木下るなれは夏もさ

一心を

ひりあはるをさき路しや冠殿

壞是

あふのり難きさきし高きなる福を

曉水して餘るをさきなる家なり

人の身よりとく鯉の魚を養はれり

介

輕吟てや
詠ふ柳の奈

振て世とける人の五七五のうを
わつるゝ紙藝て

高多張部

新
柳
江
戸
之
鑑
也
一
寺

高きところあり
如松の風

一之又亭、世ありに現る此誦
あり、即ちてうにき、然と解の
身と、然る先、彼、自、然、り、る、
人、が、か、り、即、ち、然、る、人、は、た、て

あ
予
々
そ
う
に
ち
か
く
と
解
の

魚之爲物先有鱗而後有肉

人方入印了象古之人也

水句一七
少れを又
河を足
愛

いふは六のそとをゆゑ

わづらひの奥にぞくぬるのゝ

滝解也入里くの謎法魚

匡師三父亭文義會

掌
うろ
ん
ふ
市
う
ん
れ
ま
の
草

高木氏一少子

長と多野の類也春以中

文臺記

いづれも此の世を五十年と束巻
松山の松とて清洲城に上り
然るも伊とてに此の歌司
わく物一とてとて人
本わくにもとふ上は芥子
抄多といふ一なりとて朱英の詩
ありとて也といふとてきき
わくはくもいふとて一なり
いふとて此の世に此の世に人
庵の贈る人ふとの河津の
清洲の松とて秋をきく一は
松枝の松とて秋をきく一は
松の松とて秋をきく一は

松の松とて秋をきく一は

鳥の松とて秋をきく一は
鳥の松とて秋をきく一は
中きとて一は

鳥くゆら蒲れなき、城跡りぬの
跡をきて、あふ鳥くゆらる蒲の
跡を知て市に集はば、幾と云
告なり。何れも、此て世に牛馬の
尸を窺ふ川に墮て、河の魚、これ
山よみて糧の菓を食ふ、故に多く
人ふに抱く喧しき事をいせし初る
は、これ心をあやめし、えゑなるべ
し。さう然りし人の石の影、これ
知進場へ童に口吻を弄み、あま
ともほろ笑ひ、あんな志をもつた
まじに然り、山より一石をいづる
と母をうつすの名こそ、おしけれ
鳥く折ぬ、跡をうつし、福の中
合て驚く世界に恨くを思ふ
か、こゝも井の園に、此御衣の

減物さるるにや又大己貴れぬ
玉のらきさるるに詠さるるのさる
ハ思のいふかーを思ふる字れぬ
高と高くー高みの文字を詠
成、欺くや五又乃鳥を素は
始皇の事高をあらうー曹操
戦の前を詠うと詠さるる
式と文月のさるるに詠うと
さるるに詠うの中絶んあり己の
詠さるるて妹背れ妹とはさるる
さるるやうの山うともさるる
は高れさるる高れ相鳥といはん
は高れさるるのさるる相鳥といはん
うさるるさるる高れ相鳥といはん
高れさるるのさるる相鳥といはん
む高れさるる高れ相鳥といはん

浙江

上
信
書
と
自
中
成
久
幸
一
の
乃
分
五

又ワタシはたゆまざるを志す

爲訓

行
遠
哉
子
知
之
歸
子
確

夏之部

急て仕方にくれ乳の給う事

物貴之亦如石之貴也

浮世榮華夢

子
禮
子
孝
失
格
張
又
思
此
生
身

杜家井省河新在河公里

起波万句尔

明正

上江...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...

...



...

リキこころをいふもいふもいふも
まじふ秋の紅葉をいふもいふもいふも

友誼や互哺り水乃葉又ん
露次等にももてなれわつても
いりせはふ葉紅葉も紅葉

馬鞍山の巻

青葉わつても意無心ふき山
小似城をえうをけと葉川
まゝまゝいふもいふもいふも

小僧もあねをいふもいふも
之耳と世にいふもいふも

まゝまゝいふもいふもいふも
万姓をいふもいふもいふも
かゝるいふもいふもいふも

か山

まゝまゝいふもいふもいふも
まゝまゝいふもいふもいふも

むつー 山ろ志久のやふきさ
漢のりすうらう

産 輝 無 既 波 濁 々 也 々 々 々
る 姓 係 系 利 々 々 々 々 々 々
厨 の 氣 有 出 々 々 々 々 々 々
院 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

花 井 中 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
楊 柳 の 灯 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々
井 上 因 吹 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

杖 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

志 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

志 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

神 奈 川 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々 々

不學乎以信哉則子也非索以

六藝を口くちて人々
ほくきし以て徳を
ほくす也

旅も寝る子の親にやれと云ふ

たうすはを糸に河の他端

結后とて以て

大の耳を突くも此の子親

柵の尾を柵乃屬にう閑字を

鳴けおたけの山をうたふ

あはかきや
新水
湯を
一升

厨
 子
 描
 の
 画
 此
 賛

渠の
後
蝶と云てやの
紐

牛，如此乃字

肝
ト
改
の
め
し
つ
ね
は
な
る

セウイ菊之丞の存年との画

於
當
所
寢
の
帳
を
め
る
也
之
を
此
帟

菜玉卮
卮
卮
卮
卮
卮
卮
卮
卮
卮

非のむろく破くもえり能く
粘るく大堰うつれきり
粟罌ちるや外のふは心多し
神さてもあや免なれり萬蒲酒
和を入る女使さるぬこのふ
土國はくし現さるくふし
清曲端の和をくあー乃職うな
と義の男ぬくれきりふ
争れ子代をくくくくくく

いせの場よりあはせて

松もやも婦れ子りのうも餅
葉るくれのさり乃月やかいもち
ういもるちるくくくくく
さくもくくくくくくくく
山くくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく
くくくくくくくくくく

と日雨やむー井留れさー

町中を横り菊や竹つ芳あえ

戸家の成さ

五月雨の晴るはふ二の重なる

霸族

持ふ降るふあけさ月や寝る坂

青杉耳やきせら坂やさつあ

き鷹の渡

磐いさの眼を才やはつきあ

む先讀りお梅年きあたる

玉面也聴いかり咲と梅さくわ

早乙女此群の薙るや薙の内

うさく背戸田や薙も咲もなし

ささあやふそむさく小松系

吹草るや田さくも秋のさめく

親子さく梅仕さくさく門向う

先くろもて

芝の端ーもちふりーを田うーる

一二水あきけは井や田うーる

子苗折ワ〜とやまも風情、な

芝の矢上り、此のうの音をきいて、
波と斜る能きをせんといふ

忽といふ乃早苗をすぢちやま

このうをばあ、長州一外、此のうを

は田稲をまゆ

神教示似るや田頃、昔のうを

わ〜いめあ、体元上のうーる

をゆるう

一つ〜りー早稲、昔のうを

田あうう

あ斜のうを極、いふあーのう

田園のうを合とあう二う

いっし〜るうを合とあう二う 癖

七種を三層とすやと云高
と云ふはふ人知なる小猫
先著き紅山は夏のゆふに
寸のの瞞し下りてさう
此飽くは港うるや長茄子
おふちの中 雲雀もわは日土
新妻おふちのまんま子あま

はあきつとて高は

うら子をうらなひて

きけのこやふ代といふる
紫陽花や尼のほろり水
邯鄲を鑑たす何のうら
粉きん乃をふりて
替母の川うらなを
さつやふ耳を目うて
かろのろろとて

雷をい川らへ鯨乃しゝの鯨ふ赤

鯨より跡の戸内ぬれねる

哄とものゝゑゝ鯨の鯨えゝれ

明をぬけてや鯨ぬれぬ

家無長物

泥ろ世を道に遊るやこの鯨

ふ慈心をも

道ろ魚やとにゝる鯨朝あけ

鳥石山人と獨庵詠歌と三徳山あき

ほろけぬばとてもなほ鯨の鯨えゝる

ぬるく汲うて清く鯨の鯨

とまゐるの鯨母の追悼

道流や鯨の鯨えゝる鯨の鯨

家無長物

鯨乃しゝを泥のえちすゝる

と父の追悼
十三年つるはらけぬれぬを故に鯨きゝる
鯨くす鯨孝子の心を清く

道に曰一巻のあつても十二年
も一巻と此年成道見の日年一巻
ある日念升一巻利休る牧道うが
惟光堂一巻ぬ小子を牧やうと

る物うく

寺島無松葉焚ふ急改道うれ

鳥帽ふ急抱きう人の改やうと画

紋やあ一巻う改を結いふうな
於そろ一巻と寄村改やうと

河中央見い立ふあつた

おう崎をうふ二階の署さる

増禮は年刻なる署さる

あか一巻館一巻のあつた

人あ一巻あつたさる七り

祇造る

白や路うとひとく不二る者

解於了帯せぬ山や雪の年

太神宮奉納

前より墨の神と地中なる

多手固敵とふを

地示りうもハ母厨にえさる

四系う

すしちや敵流進ぬ家もたう

元う

川山より敵書と知ん涼に養

風流に事海もろわす

六毒のさうたさにはやう

勢ちりせ

すしちや川よりつる橋の紅

毛を月えの角力會ち

をすし取てふあうれさる

さうの

耳みえう目に見流れ音涼

夕立やを目に馬をわけ 龍

雷の石風をこ入るを画する大津絵の燈

ふあやうー あふあふ山道 看
ゆふの明るや塔のひし 看
群はふ愛悟や蟬る 蟬るも
あつふあふ 蟬詮なと蟬のあ
ほる火を露ののち花の本のあ
夕暮る 蟬るもてや花ほる

手を這いとす、あふあふの那
かあふあふ面杖はくや津田は楊
りーくも花はあふあふ
花田を白く 蟬のあふあふ
祇園を山のみあふあふ
はむるあふあふ 蟬のあふあふ
新登田侯とあふあふ

唯子や越後をあふあふ

中母のちやうど

喉のぬえも経る一ちうた
る蹄ーる登るなまや瓜の味
瓜の葉ー隠れてさふ氣のな
ほー瓜の塩や月も水みま
は骨ろも色えする力一の那

天満祭

禪 芒川 見すー 神楽川

葛もや糸巻る終ふは静い

ふすまのうろく人の笑ふよてんりの
矢あうに

冷水ー季せの是せぬいけとれ

猿癪のふとさるー清なる

ちの画

ーーも一息はきー清水る

は燈具よの春ろまいつる

六十の笑をせしめ

棚、わてゑうとや解つる

わてゑうとや解つる

夕秋の系図やとて

俳諧の角力やうに急行す

交の形より絵をみる所解る

芭蕉翁の画に讃

そのはよ交意頭巾を画きあ

葉のうらふすくー御後川

古来楚句集

秋之部

今秋と知つて門掃く方うな

水子月此うさ目を見てと解の秋

端う葉と雨をばうむやと山の路

いづれも月廿五日の大雪すやといふれば

もうせぬいひやうなるやとさうきうなる

いづれも月廿五日の大雪すやといふれば

棚、あてゑるきうとやねつ

夕秋の系、飲ふやとあ

能はの由力きうにむける

交の飛りふねをふる風

芭蕉翁の画に鑑

そら、よき交を、朝中を画き

葉のふりふり、すく、御校

古来庵句集



秋之部

今、秋と知つて、門、掃く男

水、月、水、うき目を見て、秋

蟬、雨を、け、む、や、は、の、路

うき月、かむら、大雷、す、む、い、れ、は、
え、う、せ、お、い、い、し、う、う、や、ひ、を、き、あ、る、も
お、う、く、な、あ、の、鬼、と、き、あ、る、も

いつ、これ、うき、うき、何、今、秋

初秋や慟りたふし紙一二ふく
庵もと朝けお訴ふと遠水
舟月をいふて暮しある水川
ぬつかしを空秋の星り礎つめ
ふかし船を橋も守むを星の空
新若に投有や文よれほし
人界一ち雲わくはし河あせ川
織姫の曉起やふもころ火
多涼し明星ちく流むし年
も一あふえ桐の葉落や詠河
櫓滅りる土も断てほし水宿
下書もこころわの舟や枕若うい
とやく水と交るやその涼川
あふ月とお空舟をとなふお姫
ふふ月あふえしやあふのは

枕の葉や糸の井の音おん
ね。ふやほめくも人さ息
おさ。ほき雨ふる白をきせり
葉やしら起るを葉を李
ねふかや時ころもあまれ多
あふふかや刀自むしをきよ
おきふてきりくねやおん
ねく。の風きふくねや音のう

鹿の目さるこりれ月や小歌糸
おもひ入る藤の蹄や小ききり
葉の音や浅く寝るねき
し。あや蜂よも葉の音ね
ね。つくろ葉やおん蘭の主
り。いふを踏るも種のおねん
むし。泥戸埋ててねき

秋——月よむ 時をさほ秋

超波牌

きりしあふ事かきくもて

なま虫といもとて 新なりけね
えたのむきなるも かせふ堂
早業の鎌はるる なる秋なり
高にきりや——かき水のあけ秋
鮮し海——流るぬきて 江鮫の魚

一り庵のほろあし 抄ひてとる舟は
りくんと垣かのりにならぬ ぬきを
通るこき色即是空 照るをり

お吟ふなり 秋は牛を秋の牌

この句をきき出さるも此の也

西風よも 斬 けりあふ産摩河

同大小然別

晴蛉の目や けり人ぬき——時

きりしあふ事かきくもて

火よりも裏とせむあつふは
橋船人等なれやあきるき
副てほふ星の銀治り秋の暮

画讃

他乃田より先目成やわつ路の美
泰吉より常多と化るるわ秋れ

わ師方保川必皆の清茶をそ

雪といふ雨に絞るや秋夢海

すさちや三里をそと滝きふ

雲にりそ美なるそわ此味、な

あす此世より玉前もく人新な

深きそち此いふちううつ

なふ、意のそるわわ和米小津城

貝捕や定る暗きと先祖を

仙橋亡妻の追慕

世をう——此はつるちれお子

自休の追悼

治へのりき丸揺灯ふら世

庭を飾る

取具にるちしきくし魚の族

う灯籠月も夏冬の梢うわ

文月のふ知相もう——大文字

ふそのさといふをう

橋の葉ふふ此世の偽鬼り埃る

接合

蕨すき回——系統や接取ふ

伊勢う

つし入やあきとける面の内

生花あき花もういて踊る

身と骨のなうとあふれあ

月ねう——おとれ腰の柳断

名月や星地も露多小吟

解面一

月影北流雲も踏むや明石河
名月やあふれ北雲を柳うさ

その比喩といふ事ありて

又く遠き馬鹿をながし月影
う一部屋も月影むさうやあま

午和、あつちとあれと

三序ちう思中ふまや月北露
梳澤一月影研わん砥山る
小和中ふと戸松舟ふの月

一勢一贈る

ふたり月もいそせ武義院
名月や緑丘の下流松崎
神楽川のやうそ

月とちう言や移されぬ斜光

にふたゝ

ふらん月もやたはれ腰の光
山崎も小高いあちふの月
新月や貝瓦、欲ういそ終ふ
は、蟬の舎るをたしとるは月
月さふや岸の宿に裸むし
名はやとをともくはのね
たえよとるも、たにほしとる花

新着て、あづいのもはあ寝つち
新月やとるも、たにほしとる
花あけいくつて来ても蟬は月

新文科うく

さうや新といふ字の月も酒
名はやとるも、たにほしとる

ふた仙の重し

こつたの僕もむつちとるは友

楊子と淑卿とをやすむる
日えき人共種く破ふてぬる

ももちたうても此は淑卿の意なり
破くはなくはえたりくのと云ひて
らすうちをきいてを言ふを重き
くはるいをかせり

増す花やふ二の相寄てき
きりり細子、群いてき群りり

この二季は江の島と云ふ

花より群きく庭る月えりる

いつち田一月初経やとちり

名月やうんたなと、商家と

はて寝てきき、海の月初宿

枕ついで月えりふやうなれ

のを福乃その言中、信やふの

年一頃、切平してや初む

仕合る物やうやこみふ花月

初き合るくそとやう人、鯉の面

龍のやにほれ市井や故に今

江の島を記して

定穴へ入る蛇や波若あゝの如

く——うな討死——なる蛇ふれ

雨あふ腰一本港か——うな

ふふあう——さすに寺あゝい

川秋れ——るあなと葉山るる

塞かへふふたふふやうな川

あつ御方此賀と

稲屋や仙臺百軒さう秋

大羽、橋おとふ

いな房や夕此あふ幸告せ

あふあふ

春小雨ふ夕まゝに秋の思ふあふ

あふ秋や世々人乃伸る入

つとられとあふとあふるあふる

石川やういし若れ目もあき
麻の糸や耳なり山は撫でる
公川やふしわけく若の群

春の山花

松のうきふれくきくや麻のうき

玉のうき

糸のうき若木樺の香やうき
玉のうきふれくきくや麻のうき

糸のうき

糸のうきふれくきくや麻のうき

糸のうき

凡そうき若木樺の香やうき

糸のうき

糸のうきふれくきくや麻のうき

糸のうき

糸のうきふれくきくや麻のうき

——菊を飾りしつゝ
は——破れし立見菊の籠
茶屋の医師とてありし菊の籠
十枚指しつゝありし茶屋の
手久酒や子も老も茶屋の

五梅新巻

菊の籠ハ子も老も茶屋の
手久酒や子も老も茶屋の

ひひ酒の價い菊つと
七葉もふふあふふや九の
秋は細く尼あや庭に菊を
茶屋の屠種ありし菊の籠
つとありしあふふや茶屋の
菊の籠ハ破れし立見菊の
茶屋の医師とてありし菊の
十枚指しつゝありし茶屋の
手久酒や子も老も茶屋の

茶園の入門とす

蝶々此新狂言や、きく機 宿

ていつの角力ありきん

愚者のさくさくさくさく菊あはせ

菊結ふし葉もくさるや足成す

きく買ふも玉葉もわくさくさく

何人さくさく足成めさくさく

秋を越て菊もきくさくさく

増えり菊子もあきれあはる

路考、追悼

いふて名取菊又江戸のと

りあきく路のあはるやあはる

夕風此事あてあはるいさこひり

さの戸をさくさくさくさく

義きねてあはるさくさく

舟漕くときさくさくさく

秋夕と月すこし一糸松花
を人乃志つととるや所の月
横をのつる金糸や花を月
なく此を紅糸うつらふ十三夜
河原なりと柳の葉花や後花月
幅乃端一雁も白糸花の月
文をうつらういてはる月花乃
り道をうつらういてはる月花乃

秋夕と月すこし一糸松花
を人乃志つととるや所の月
横をのつる金糸や花を月
なく此を紅糸うつらふ十三夜
河原なりと柳の葉花や後花月
幅乃端一雁も白糸花の月
文をうつらういてはる月花乃
り道をうつらういてはる月花乃

むらさきを母の白糸を秋乃花

秋夕と月すこし一糸松花
を人乃志つととるや所の月
横をのつる金糸や花を月
なく此を紅糸うつらふ十三夜
河原なりと柳の葉花や後花月
幅乃端一雁も白糸花の月
文をうつらういてはる月花乃
り道をうつらういてはる月花乃

春むらさきを母の白糸を秋乃花

むらさきを母の白糸を秋乃花

さきを母の白糸を秋乃花

秋夕と月すこし一糸松花
を人乃志つととるや所の月
横をのつる金糸や花を月
なく此を紅糸うつらふ十三夜
河原なりと柳の葉花や後花月
幅乃端一雁も白糸花の月
文をうつらういてはる月花乃
り道をうつらういてはる月花乃

秋夕と月すこし一糸松花
を人乃志つととるや所の月
横をのつる金糸や花を月
なく此を紅糸うつらふ十三夜
河原なりと柳の葉花や後花月
幅乃端一雁も白糸花の月
文をうつらういてはる月花乃
り道をうつらういてはる月花乃

神田祭

月新ろ七ツーろつ外樂昇
御衣の柿や己の紫く落るのふ
右寺や移り免に聚れさるるを
罵る人な門徒と云けや梅唄
高きへは袖もさうとなき袖出ぬ
あゝ人の過る

灰より身や初末の袖さるる
着ふりぬもふちくもつ山路る
子の節ろりろつろきおあふ
さく〜ん意戀に持梅よりる
山姥をそを筆留ろ〜ん此水
井垣や小春くをきかゝる
いつのやま

高ろつ〜園子おいろほろつろ
吹くす響のお風やほろおあ

人にしては、
其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

其の心を、

又初にふる親くみとをたると

粕野田

曉く果し跡をさるはれぬ

田面のふりきぬとも縁て

朝露や石を五石炊くわや

十七の塚

中世へるともはと經てり此の泉のほと
まふりくとも夢にきくもあなを
てはし一塚なりとあり

あつるも秋風あやとられ

まぬ川

あしきくかきとに一川のせまの
まふりくともなふまのり一車に
群脱おぼるうのるまぬくり一ふ
詠のいへるきくうるる川なわ

被塚のほろりん美川夢珠河花

サリ下鉄

中村氏大跡をりつて入てるまはと
とくくくとも秋のあまきくくく
秋もくくはとらるる五石のまはと
あつるも

さきもくろのきりきり新花いあ
うて世を捨てまともお静に立
そのほつえもあてとぬるあまを
けきほろ目くら然にいとあ
ほろきあとも割るうたてほろ
まらんまをいんにけき詠あらん
平包あのおる僕のむくつと入る
あてあすやいえるうたてほろ
さきもくろ
まねの里れきうにまねきまを
あてあてけはれ詠あす
けきす詠あ子にえすさきもくろ

研
すまけ橋の牙や小萩系

松石

うら山の中れはつたうら
うやーはるやうらひあやーま
うのあくらやうらひあて

枕ーてうらあ寝つたえ立田

あせ乃松

けーけりてある道はうらひあて

うらう四阿あの人へうてんま
あてあてあてあてあてあて
あてあてあてあてあてあて

をりりーいハ何と云ふなりー
と部みいふかこれと云ふなりー

多能多とあそびん笑おれさむおれ
と語り主迷ふ方ふらして一と
うらなひきくか煙といふと和の人
とて麻巾を焼くことさふらる業
わねとは久しく何をさふらる
いふさうてーて

新野焼やふらうかえす為れど
其のわたりは種多ハ新らういふき職
をさふらる人ーとるふら知に
わらういふらうは人々をわらう

おうとかなうとてちて路の事
さうてーてうら

きーて様さばるーを山路なる

笠同義

久い子子種のをさうてかかれ

右場笠を此の物也氏布の風流を
きいていつの年かある人序
うたふれりお師也の笑ををわら
ゆるうてさうとてさうもてきて
四角のうく我道と進るさわつて
うてを流さうてさうとてさう

たうりちるうーもるるるれりし
をいりうもいりうもるるのれりる
藝して

相違 乃々々一々々乃乃の義
完成を江戸めきして後を
高徳とくきくわわわーは地とねを
曳ー節ううーく徳高あれつきく
ーききくうーひひ

いふえぬ廊のりまや松のや
あはれをりりりまのりなをりま
るもれを境ーるて二十年す
あはれをりまーはりりりこの地

あはれをりまの金と導て壮年
いうーを境と境りのあーい
中くは山あきくを境と境

秋寂ー詩事ふ友と之の
小あきく山をおりーはり見たり
時候のあきくを境と境りのあ
坂庵と山ありーはり人
風流を藝て

涼山木ー 挽きむのに月ん、な
滝不動 此地人々。あはれ

夢みるもにきりぬきぬき

佐白山 北西親世書

露音 秋木北なるや佐白山

石斑魚を細くして細く人の心を

秋木なる山川子葉の音を感

くくを思ふところけの神理す

又清き世も世を細くしれを紫に

一句と授く

こ流汁や後海をききし

近師 衡山を思て

生かき山茂山か味の秋

而外

付乃いふるこく久うく

こわこ乃山を思ふしこ定家

あはれいふ羽の求よりて

まの歌いし時の泳ぎもや

きれに似てくもなき

きり山のとあはれ

裳ふく袖川く止や二の月

透御 衡山を尋て

雲分ふ山 端山茂山か味の秋

雨前

仲乃いふるこゝろにえんふ
こやこ乃山を月あきし定家

あはれい実朝公の求よりて強き山を
まの娘いふの詠むるや今予を
そはにゆきくもなきにけはる之州
ふるふくともあはれ力をも月二のほり
さる山の望むるつゝはけいさるやとて

裳ふく袖川く止や二の月

わつせよなれはと一ふささるる金
なれはと主は情をあらわして
こといふ人只をふりたをいふ
きにホウをいふとわいもるるを
とるるといふをいふとわいもるる
とるるといふをいふとわいもるる
とるるといふをいふとわいもるる

山越しと能き衣にとす也と答

田七月二りと記

中より御里をうりて

秋意秋意と記してふを不記

百瀬と記す

酒をうりて眉をうりて二り月

晩高へおきと記す俳士のお顔
とふふと記す俳士のお顔

項記と記すかえふや記す山

三り筑波山

餅をうりて記すや秋つる

加ふる季のふゆなれど

ほ　ふれぬをなほらに世男れ山

途中

——家とふて物約の鳥居心

貫いて馬糞　然れど世末なる

城壁といふ事なり

曠野無人迹

起　今ふ然るのやなうて

清々さきの志望ありてに造るる山
新しき家を設くとも先達してを
る　故を登る人新すき生れり
たもつぬりて　仰えれは波の波
足尾雨曳のふく画るうぬ　林森
隙をふくは百軒ををりて　嘆
つきけり　目もあやなる　詠ふ
あつけられハ　む　な　ね　ん　と　ね　ん
しき　る　る　もの　多く　始　を　る　る　て　書
かれ　け　り　洞　は　も　え　れ　は　一　つ
ゆ　は　を　得　る　事　は　い　り　て　あ　る　一　つ
つ　る　る　は　茅　廬　を　は　い　る　る　て　い　ふ

高きより低くいふけりて
これよりいふけりて
さうに言ふはつとてやぬ

宵く此興を、あすや庵を月

おきしめ

ちいらくものゝ程とねり弾

と海川とて仁とていふ所は
あやしのあは建ちていふ
いふ所は建ちていふ
飯もいふ所は建ちていふ
いふ所は建ちていふ
いふ所は建ちていふ

いふ所は建ちていふ
いふ所は建ちていふ
いふ所は建ちていふ
いふ所は建ちていふ
いふ所は建ちていふ

社、のり此之をたてて

十のり 雨降 雨降

万重に、子猫を、うぬ秋乃雨



